
壊れた海のひとつまみ

北本彩和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた海のひとつまみ

【Nコード】

N3664B

【作者名】

北本彩和

【あらすじ】

矢島明の記憶は海で始まる。母親がいない兄弟の夏休み。嵐の夜に、海からの迎えがくる。

プロローグ（前書き）

この小説は私の空想の産物で、精神疾患や行方不明などの人またその関係者への中傷を意図していません。現実とは大きく異なります。

プロローグ

ぼくの母は死んだらしい。もう五年も前の話だ。ぼくはその時のことをはつきり覚えてない。八歳だった。

らしいというのは別に、生きていて欲しいなんて思っているからじゃない。常識的に考えれば生きているという、ただそれだけのことだ。

葬式は行われなかった。

父が母は死んだと言い張った。祖父もそうだと静かに頷く。けれど近所の人達の噂をぼくは知っている。母は僕たちを捨てて、逃げた。蒸発した。もちろんそれが憶測に過ぎないこともわかっている。違う。噂なんて知らない。父が母のことで何かを言ったことなんて聞いたことがない。祖父は確か、ヨモツヒラサカの向こうに行くと重々しく言った。ヨモツヒラサカが何かは分からない。不思議な響きの言葉だから覚えていただけ。

そして兄は、海ニカエツタと言った。

人魚姫でもあるまいし、と今のぼくは思う。人魚なんて子供向けのお伽話にすぎない。生きていたとしても五年も子供を放ったままの母親に何も期待などしていない。いつそ死んでいてくれたらとさえ思う。

ただ当時のぼくは海の中にヨモツヒラサカがあつて、その向こう側に人魚の国がある。虹色に光を弾く白いお城や、貝で出来た家が建ち並ぶ、夢の国がある。そこに母は行ったのだと、漠然と思っていた。

そして今、覚えていても良いはずの母の顔さえ覚えていない。何となくいたのだろうなあ、という程度の認識。ぼくはそういう子供だし、母だった人もその程度の親だったのだろう。

夏休みが終わる、一週間ほど前の日だった。数年ぶりに台風が関東地方を直撃した。午後から次第に雨足は強くなり、風は激しかった。

この頃母の様子がおかしい。今日は更におかしい。僕は不安でしかたない。どこがどうとは言えないけれど。外は言葉通りの暴風雨なのに、カーテンも閉めずに外を見る。その後ろ姿が怖い。

夕飯はハンバーグ。弟の明が大好きなメニュー。実は僕も好きだけど、中一になってそれを言うのは気恥ずかしい。黙っていても気付く物らしい。母親というのはそういうものなのだろうか。意味ありげに微笑んだ。

それから弟。五歳も年の離れた明はかわいい。精一杯意地を張ってもやることが子供で見え見えなところとか、何かあるとすぐ『お兄ちゃん、お兄ちゃん』と纏わりついてくるところとか。うっとうしくなる瞬間がないとは言わないけれど、やっぱりかわいい。

一生懸命話す弟の言葉を聞きながら、三人で夕飯を食べた。いつもよりも品数が多いような気がした。食事が終わり後片付けも済んだ後、母がゼリーをだしてきた。

丸ごと果物が入ったゼリー。カップからわざわざお皿に逆さまに出してテーブルに並べた。透明のゼリーがガラスのお皿でふるふる震えた。

「お母さんの分は？」

テーブルには二つしか並んでいない。

「お母さんはいいの」

「何で？」

「それより明のこと呼んで」

呼ぶと軽い足音がして、うれしそうに明が走って来た。

僕たちが食べる様子をぼんやりと見つめた後、母は違う部屋に行

った。

今日の母はいつもと違って、何処か怖い。不気味な感じ。父は出張で家にいない。この不確かな感触を相談する相手はいない。

様子を見に行こうと席を立った。

「お兄ちゃんどうしたの？」

何も気付いていない弟には言わない方が良い。

「おなかがいっぱいになっちゃったから。明これいる？」

「くれる？」

「いいよ、あげる」

ありがとうと言ってうれしそうに食べるのを再開した。食べかけのゼリー一つで、こんなに喜ぶ弟はかわいい。怖がっていた気持ち、少し和んだ。

母の様子を見に行った。母は何故か着替えていた。鏡の前で髪を括ろうとしている最中だった。

「…朋、どうしたの？」

滅多にはかないジーンズをはいて、白いシャツを着ていた。

「どこか行くの？ 台風だよ」

様子がおかしくなってから、夜になると家を出ていることに僕は気付いていた。浮気をしているのかと思った。母に限ってという気持ちと、もしかしたらという気持ちの間で悩んだ。

それで、とうとう三日前、母の後をつけた。浮気相手の男を見た気持ちが見たくない気持ちに勝ったのだ。

浮気ではなかった。会っていたのは女の人だった。白っぽい服を着た、母と同年代の女の人。

隠れるように夜に会う必要が何処にあるのかわからなかった。もつとどうどうと昼間会えばいい。

「ツキノ、遅れてごめん」

「気にしないで朔乃。ほんのちよつとじゃない」

母は僕に背を向けている。

それでもいつもと違うのがわかった。『お母さん』ではない。も

ちろん僕と明がないからということもあるのだろうけど。

この人が、ツキノという人が母の変化の原因に違いない。

肩を寄せ合うように砂浜に座って話す声は僕にまでは届かない。

声自体も小さかったし、規則的にくり返す波音がかき消した。

僕に分かるのは、二人がとても仲が良いということ。母がおかしくなり始めたのは長く見積もっても二週間くらい前。その時初めて会ったにしては二人の距離が近すぎる。二人は親密すぎる気がする。まるで、昔からの知り合いみたいだ。

会話の内容を聞きたくて、もつと近くに行こうとした。その時ツキノと目があった。母の背中越しに微かに笑った気がした。

そのことが脳に伝わるまでの一拍の間をおいて、背中に悪寒が走った。触らなくても全身に鳥肌が立っているのがわかる。

ツキノが恐ろしい顔をしているとか、そういうことではない。もしそうでも夜のことはつきりとは見えない。

ただ嫌だった、怖かった。ふっと血が下がるような感覚。足下の不確かさに気付くような、崩れていってしまうような恐れ。

何も考えられなくなった。本能のままに僕は逃げた。どういう風に帰ったかはよく覚えていない。ただ、走っていて、気が付くとマンションの前だった。

この日のことは僕の秘密。誰も信じそうにないから。

それから三日。母はあの人に会いに行っているようだった。僕は知らない振りを続けた。そして、母を問い詰める日が来てしまった。

「お母さん、返事は？」

「台風なのはもちろん知ってるわよ。朋ちよつと来て」

部屋の入り口に立ったままの僕を母が手招きする。

手のひらに収まる青いガラスびんが渡された。

「何これ、カラだよ？」

「台風が過ぎたら、明日は晴れるでしょ？そしたら、白い貝殻の欠片を拾って、入れておいてくれる？」

「いいけど、何で？」

青いびんごと母は僕を抱きしめた。短くて濃い数秒間。

「ごめんなさい」

その小さな声に、咄嗟にどう反応すればいいかわからなかった。

答えになっていないと、反駁するのが悪いことのように思えた。

僕が次の行動に躊躇っている間に母は玄関に行った。

今にも出て行ってしまいそうな母に再度問いかける。心臓がドク

ドクという音が耳の奥で響いて、息がしづらい。

「何で？ 海に、行くの？」

少し驚いた顔をして、笑って頷いた。

「朋は知ってたんだ。そう。お母さんの行き先は海。朋はしっかりしてるから、明のことよろしくね」

明るい笑顔だった。そこに明が来た。

「お母さん、どっかいくの？ ぼくも外に行く」

「お母さんはね、人魚に会いに行つて来るの。明はお兄ちゃんの言うことをちゃんと聞いて、良い子にできるよね？」

「ウソつきー。ホントにいるならばくも人魚に会いたい」

「だめ。今日、明が外に出たら飛ばされちゃうよ」

「お母さん、やっぱりウソなんだ！」

ふくれて明はリビングに走って行ってしまった。

「じゃあ朋、後はよろしくね」

母はドアを開けて出て行った。

傘は傘立てに残ったまま。僕はその傘を掴んで母を追った。住んでいるのはマンシヨンの三階。階段でなら、マンシヨンを出る前にエレベーターに乗った母に追いつける。

息を切らしてエントランスに行くと母の後ろ姿が見えた。

「お母さん！」

母は振り向かない。更に僕は走る。

マンシヨンの前にある三段の階段。その向こうに人影が見えた。白っぽいロングスカートの女。ツキノがいた。

ツキノは母に手を伸ばした。その手を母は取った。

「お母さん！」

母は振り向かない。その代わりツキノが僕を見た。せつば詰まった僕の声がエントランスに反響する。

道路と建物を繋ぐ三段の階段を、母は下りた。

ツキノが勝ち誇ったように僕を嘲笑った。

僕は痺れたように動けなくなった。だから、ただ見ていた。雨に濡れて、黒々となびく母の髪を、腕に張り付く白いシャツを。その横を歩く、妙にくつきりと浮かび上がるツキノの後ろ姿を。

傘を差さない二人の姿が消えるまで、僕はじっと見ていた。見詰めることしかできなかった。

どれくらいの間そうしていたのかはわからない。とても長い時間だったようにも思えるし、ほんの一瞬だったようにも思える。我に返った僕は、父に連絡を取ることを思いついた。どうにかしてくれるのではないかと期待した。

階段を駆け上って父の携帯に電話をかけた。呼び出し音がもどかしい。カチツという音がして音が途切れた。

「もしもし、お父さん！」

「ただいま、電話に出ることができません。ご用件の方は、発信音の後に」

そこで電話を切った。

どうすれば良いのか、もうわからない。外は台風。父には連絡がつかない。海まで追ったとしても、母を連れ戻せるとは思えない。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

どうすればいい？

弟が不安そうな目で僕を見上げていた。返す言葉が見つからなかった。

「お兄ちゃん？」

小さな体を抱きしめることしかできない。子供扱いを嫌がるようになった明も、この日はなぜか嫌がらなかった。

明はそれ以上何も言わなかった。

僕には弟と青い小びんだけが残された。

そして、母は帰ってこない。

そのことを受け入れることができない。何かを考えることもできない。僕等を置いて母が行ってしまった、その衝撃で頭の中が飽和状態。

早く朝になればいい。全部が悪い夢だったと言いたい。

ぼんやりとしたまま、ひたすら事務的に弟をお風呂にいれ、その後寝かしつけた。何も知らない安らかな寝顔がかわいくて、そしてかわいそう。

弟は、捨てられたことを、まだわかっていない。

滲みそうになる目を擦って父の携帯にもう一度電話をかけた。変わらない留守電の声に溜息をついて、できる限り簡潔に母のことを録音した。

それから自転車なら気軽にいける所にある、母の実家にも電話をかけた。そこには祖父が一人で住んでいる。コール二回で電話に出た祖父に、同じ説明をくり返す。

くり返し言うことで母が帰ってこないことが、確定事項になっていくような気がする。泣き声になってしまった僕に祖父は気休めを一切言わなかった。まるで電話を覚悟していたみたいだと思った。

「明日になったらおじいちゃんの家においで」

その言葉を最後に電話は切れた。短いはずの夏の夜は、息が詰まるほど長かった。

翌日僕は祖父と二人、向き合って座った。一緒に来た明は蝉を捕まえに公園へ行っていない。祖父と二人きりで話すのは初めてだ。空気が重い。

昨日のことを詳しく話した。一人で抱えていられない。明を騙し続けられない。

「それで、朔乃はその女の人をツキノと、そう呼んでいたのかい」
「はい。でも、ツキノって、何か変だった。どういう知り合いだったか全然分からなかった」

蝉の声がとても、大きく聞こえた。頭の中を、その声だけで埋めていこうとしているみたいだった。できることなら、僕はそれでいっぱいになってしまいたかった。

チリーン、チリリーン

涼を求める風鈴が、そしらぬ顔でどこかで鳴った。

「ツキノは人魚だ」

「何を言って…」

「海で死んだ人間は、みんな人魚になる。月野も朝美も…朔乃も」

「お母さんは、死んでなんかいない」

「ああ。そうだいいとおじいちゃんだって思ってる。おじいちゃんはお母さんの父親だ。だけど、朋君は青いびんをもらったんだろっ？」

僕は説明のために、持ってきた青い小びんを祖父に見せていた。

「びんはもらったけど、でもそれが何？ それに月野と朝美って誰？」

祖父は複雑な顔をしていた。

「今は、話すのを待ってくれるかい。朋君はまず眠らないといけない」

「そんなの平気だから、一日寝ないぐらい大丈夫だから、だから教

えて」

「必ず話すから、最低一時間はまず眠らないといけない。その間におじいちゃんらは心の準備をするから。それでもだめかい」

無理に笑った顔で、強がっているのがわかった。だから僕は折れてあげることにした。

クーラーをいれた部屋でクッションを枕に眠っていると、タオルケットがかけられた。乾いた柔らかな感触と微かな暖かさ。気遣うやさしさを感じて、眠った振りをしたまま僕は泣きたいような気持ちになった。

母と重なるこの感覚を、この曖昧な幸せを、僕はもう二度と味わうことができないだろう。

薄青い無音の町、ホログラムのように微妙な色合いで光を放つ建物が並ぶ。熱くもなく、冷たくもなく纏わりつく大気が気怠く重いけれど同時に、たゆたうような安らぎがある。遙かな頭上に、ゆらゆらと光る境界が見える。

そこで自分が海の底に沈んでいることを知る。この青さは微かな光しかないこの場所での闇だとわかる。輝く水面に上がりたいと思う。痛いほどの太陽が恋しくなる。この青い世界はあまりに静かすぎる。このまま心地よい水の中に溶けていってしまえそう。ここは全てに満ちた場所だから。自分を呼ぶ場所だから。

それでも、ここににいるわけにはいかないと思う。浮かび上がろうと勢いをつける。振り向くと、有無を言わせない白い手が腕を掴んでいた。ゴボツと大きな気泡が口から漏れる。全身で抗うのにどうしても抜け出せない。もがけばもがくほど口から空気が逃げていく手には強い力が入っているようには見えない。柔らかそうな女の手。自分の背が、女の胸までもないことに気が付く。自分の腕が頼りない細さなことに驚く。子供の視点で女を見上げた。女の顔は青く影って判別できない。長い髪が括られたまま逆立っている。

なだめようとしているのか、女が歪んだ形の飴を取り出す。食べさせようとする。その形は鱗を連想させた。金色がかったその白い飴を食べてはいけない気がする。戻れなくなる。根拠もなく強く思う。

苦しくてたまらない。息ができない。

頭の何処かでこれは夢だと声がする。この声を待っていた。ああその通りと理性が応える。

女も町も全てが曖昧に溶けていく。溶けだした夢の中で、ほんの一瞬间女の顔が見える。それなのに誰の顔だか分からない。見たことがあると思うのに。

それさえもいつも通り。何度も何度も見た夢だ。呆れるほどにくり返す、夏の始まりを告げる夢。たぶんこれからもくり返す。これ以上、夢の世界に続きはない。

ぼくの記憶は海で始まる。兄と二人、海岸で割れた貝を拾った。

それ以前の記憶が全くないわけではない。風に揺れる今と違う柄のカーテンや水色の持ち方練習用の箸、そういう断片的なことなら覚えていいる。いろんなことを覚えていいる。ただ、前後関係がはつきりしない。時間の流れの始まり、鮮明な記憶の始まりはそこなのだ。

貝拾いは、割れた白い貝でないといけない、という変わった条件がついていた。覚えていいるのはきつとそのせいだろう。拾った貝の欠片は青いびんにいれた。あのびんが何だったのかは知らない。兄が持っていた。

びんに入れた貝は、ほとんど原型を留めていない。青いびんに入ったそれを、海の欠片だとぼくは思った。

とても天気の良い日で、海の間こうまで青い空が続いていいるようだった。波が光をうけてきらきら光ってきれいだった。波音は繰り返して続いているのに、静かだと思った。強い風が吹いて気持ちよくて、兄が何も言わずに頭を撫でてくれてうれしかった。

たぶん祖父の家からすぐの所にある海岸だろう。ぼくの家からも自転車で行ける。遊泳は禁止されている。夏休みに泳げない海はそこにある意味がないと思う。

けれど、兄にとつては意味のある場所らしい。ぼくを連れてよく行った。最近は暇になると一人で行っているようだ。波の音を聞きながら、日陰でぼんやりしているらしい。兄にも一人になる時間が必要ということだろう。細かい詮索はしないことにしている。

兄の朋は身びいきを抜きにしても、よくできた人間だ。だけでもう十八才、進学とか友達とか恋愛とか、まだ十三のぼくには計り知れないいろんなことがあるはずだ。そしてぼくも、もう自分のこともできないほど子供じゃない。

もっと兄は楽に、自由になって良いはずだ。家を省みない父と捨

てた母の、一番の犠牲者は兄だ。

ぼくにはいつも兄がいた。それはぼくが一番知っている。それはかなり重要なこと。母親がいないことで引け目を感じないように気にしてくれていた。小学校や中学校での細々としたこと、例えば遠足のお弁当。余所のお母さんよりきれいにできた卵焼きは兄の努力と練習の成果だったと、ぼくは知っている。兄は知らないと思っっているかもしれない。けれど、『みんなと一緒にがいい』という気持ちはよく分かってくれていた。

兄にはいつもぼくがいた。それもぼくが一番知っている。庇護すべき弟。きつと重荷。中学高校と、兄は部活にも参加しようとしなかった。ハッキリ聞いてみたことはないけど、たぶんぼくを一人でほうっておけなかったから。父親は頼れない。あの人は仕事に生きる人だから。そんな風が変わってしまった。ぼく達がだんだん母親に似ていくから。

本当に似ているのかどうかは判らない。ぼくは母親の顔を覚えていない。ただ、他人からそう言われている。

父親はその言葉を聞くのが嫌いらしい。

あの人の考えることがぼくにはさっぱり解らない。解ろうとも思わない。母親の写真は全部何処かに隠されてしまった。捨てられたのかもしれない。

母のいた痕跡はできるかぎり消されている。何をそんなに必死になっっているのか解らない。あの人は、自分を捨てた妻のことを忘れてしまいたいのかもしれない。

あいかわらず父親が何をしているのかはさっぱり知らない、興味がないから別にいい。兄はこの夏とうとう予備校に行くことを決意した。通うのは夏期講習だけだそうだが。受験生なんだからあたりまえなのかもしれない。けれどぼくはその決意をいいことだと思っ

た。
予備校にいる時間は完全な兄の時間。受験生という身分で家族をさばることが堂々とできる。

家族をするのはかなり疲れる。はつきりしてはいくせに、動かせない役割分担が決まっているから。ぼくはただ弟をやっていたらいい。兄は、兄をやるだけでなく母がするはずの役までやってきた。父は家族を放棄しているから、その穴も兄は埋めようとしている。一人で三役はさすがにきついだろ。弟をやるだけでもそれなりの苦勞というものがある。

夏休み、学校のない期間中の待避場所ができた。学校があればそこで兄ではない矢島朋になれる。学校の代わりができた。

兄にもう少し余裕ができればいいと思う。海にいかなくても大丈夫なくらい。悩まないのは無理かもしれない、理由が何か知らないけど。でも、安心できる兄でいて欲しい。

婉曲な我が儘。はつきり言えば、ぼくが安心するために兄は不安でいてはいけない。それだけ。

自覚してもぼくは自己中心的な自分に落ち込んだりしない。一々自己嫌悪してられる程、自分がまっさらな存在ではないことはとつくに知ってる。ぼくは無垢な子供ではない。

兄が朋になっている間、ぼくは弟でなくなる。弟であることのメリットはデメリットよりも大きい。だからそれにはたいした魅力はない。けど、たまにはそういうのもいいかもしれない。

夏休みが始まる。ぼくはしばらくの間学校から自由になれる。兄は家族から解放される。じつとりと暑い夏は、きっと楽しい時間になるはずだ。

「通知票どうだった？」

クラスで一番仲の良い新藤雅紀が、ぼくのところまで成績を自慢しに来た。終業式の日にみんなが使う言葉だ。普通この言葉には好奇心や不安が微量とはいえ含まれるものだが、彼に限っては違う。

新藤は自分の成績を純粹に自慢する、そのためにこの言葉を使っている。ひねくれたことに、僕以外の、周りのクラスメートに自慢するために。ぼくに向かって話すくせに、聞かせたいのはぼくではない。

確かに同じような成績のぼくに自慢することはできないだろう。ぼくは社会が少し苦手で新藤よりちよつと悪い。新藤は国語が苦手。教科全部を合計すると同じになる。

「通知票？ 見たかったら見ていいよ。新藤はどうだった？」

「……いつも通りってどこか。相変わらず社会苦手だよな、おまえ。あんたただ暗記すればいいだけの教科のどこが難しいんだ？」

「そういうおまえだって国語、苦手じゃないか。おきまり通りの偽善的な文章を、大人の考えそうなこと書けばいいだけだよ。これがないければ新藤はオール5になるのに」

「明に言われたくないよ。おまえだって同じだよ」

「まあね」

因みに五段階評価。苦手と言っても4だ。

聞いていない振りでしゃべっている奴らに、聞こえよがしに会話して彼は満足したらしい。自分の席に帰っていった。ぼくは彼の片意地張った性格が好きだ。

かわいそうな子供になることを、傲慢を装って抵抗する。応援する気はないけれど片棒担ぐ気は充分にある。共犯者になってみるのも楽しそうだと思う。ぼくはかわいそうな子供だから。

抵抗をやめるとそれはそれで特別扱いも大したことじゃない

と気付く。もう中学生、そろそろ氣を使うということを感じる頃だし。それに、かわいそうというだけで特別扱いされ続けられるわけでもない。

氣の弱げな、母親のいない、少女と見まごうかわいらしい少年。如何にも薄幸そうだ。かわいそう、その言葉を糸口に構いたくて仕方ないのだ。

もしぼくがものすごい不細工だったら、誰もぼくをかわいそうなんて言わない。異物として排除するか、侮蔑混じりに眺めるだけだ。きつといじめの恰好のエモノになっただろう。これはぼくの妄想かもしれない。けれど人間は冷たいもので、自己中心的なものだとはぼくは知っている。

氣の強い、父親のいない、整った容姿の彼もそういうことに氣が付けば楽に生きられると思う。しかし彼なりの理屈と正義に基づいた言動は僕の娯樂の一つなので氣付いて欲しいとは思っていない。新藤の両親は離婚していて、彼は母親の方についていった。

世間の理不尽さに密かな怒りを持つ彼は、ぼくにとっていい奴なことだし、それで充分だ。

「矢島君って頭いいんだあ。羨ましいなあ」

新藤がいなくなったのを見計らって、近くの席の女の子が甘えるように語尾をのばして言った。

「そんなことないよ。でもそういう風に言ってもらえるのはやっぱりうれしい、かな？」

はにかんだような微笑みと共に言った。それを見ていたのか、他の女子も加わる。

「矢島君は、頭いいよ。分けてもらいたいくらい。あの新藤君と張り合えるんだから」

ぼくは笑っているだけでいい。彼女達の名前さえきちんと覚えてない。ハットリでもムトウでも、呼ばないぼくには関係ない。だから、どう漢字に変換するのも知らない。ぼくの氣をひくために拙い語彙で褒める彼女たちに、望み通りの笑顔を見せてあげるだけで

いい。ぼくに望まれているのはそれだけだ。

新藤の言動は彼女たちの好みには合わないことが多い。わざとらしい、傲慢、他人を見下している。それが下された評価。彼はぼくのように、皮肉でない賞賛を直接受けることはまずない。

一生懸命な褒め言葉を聞きながら、相手を見下す。そして、ぼくのそんな気持ちにも気付かない讚美者をバカにする。その楽しさをきつと新藤は知らないだろう。

彼女達の中の一人が爪をピンク色に染めているのを見つけた。ちよつとしたサービスを試してみる。

「その爪、なんか塗ってる？ 似合ってる」

言われた子は顔もピンクになった。単純なものだ。学校にわざわざマニキュア塗ってくるのもどうかと思う。ただ、その色自体はきれいで貝の内側みたいに光の加減で色が微妙に変わって見える。凝視してしまつたらしく、彼女はピンクから赤に変わった。

帰りの会がやつと終わり、たくさんの宿題と一緒に夏休みがきた。

この夏をばく達は祖父の家で過ごすことになっている。兄は夜遅くまでぼくを一人にしておくことが心配らしい。何かというと預けられるせいで、ほとんどあの家はセカンドホームと化している。

実は母がいなくなった時点で、ぼく達兄弟は祖父の家に引き取られるという話もあった。ぼくの祖母に当たる人はすでに亡く、母の姉になる人は海難事故で十代のうちにこの世を去った。一人きりで暮らすのは寂しいでしょうという話だったらしい。本音の部分はきっと、父はまだ若いし再婚でもしたらどうだ、というところだろう。再婚にばく達はお荷物だ。

祖父自身は乗り気だったそう。父はきつと例によってあの無反応だったのだろう。母の失踪直後ならば、もしかしたら今とはもつと違う反応をしていたかもしれない。しかし兄が嫌がった。当時中一だった兄の考えたことはぼくには予想できない。

祖父に理由を聞いてみて欲しいと言われた。

おじいちゃんにも言えない理由って何だろう。

好奇心に駆られて、ぼくは頼まれたままに尋ねた。兄がどんな顔をしていたかは覚えていない。ただ、長い間躊躇ってから言った。

「あの家はウチよりも海に近い」

意味が分からないまま祖父にぼくは伝えた。

「そうか…」

頷いたとき祖父は何も言わなかった。

お兄ちゃんは大人数だから、ぼくに分からないのは当たり前だし仕方ない。

そう考えていたことを思い出した。当時の兄と同年だというのに、未だに意味が分からない。

今年の夏はこの謎を説明しよう。

母の関係している思い出はタブーだ。話してはいけないと言われ

たことはない。禁止さえされない完全な無視。取り繕われることもない完璧な禁句。暗黙のルールを破る。

大義名分はもう用意してある。ありがたいことに学校が、頼んでもいないのに用意してくれた。夏休みの宿題の一つ。

プリントに自分の名前の由来と小さい頃の出来事を調べて、写真を貼ってくる。家庭科の宿題だ。

どのくらい小さい頃のことを調べればいいのかは分からないが、小学校入学前なのは確かだろう。その頃ならば母はまだいたはずだ。その時のアルバムを探せば、母が写っている写真もあるかもしれない。母の顔が見られるかもしれない。

但し、そもそもそんなアルバムはあるのか。それは謎だ。

祖父の家に移って二日目の今夜、花火をする約束をしていた。夜の海にぼくが行ける理由がそれくらいしか思いつかなかったからだ。海の近くを嫌がるくせに、兄は昼間の海岸にはよく行く。それについてにはぼくにも何も言わない。だから、夜に海岸へ行きたい。

それでも一人では行こうとしないところが僕らしいと言えらしい。兄に毒されて夜の海が、怖いのかもと考えて、バカバカしいと打ち消した。

「お兄ちゃん、花火やりたい。…買って？」

昨日、昼ご飯は何にしようと言いながら行ったスーパーで、わざと子供っぽく言ってみた。上目遣いで言ってから、緊張しているのがばれてしまったかもと焦った。おもしろそうに、ぼくを兄がじつと見下ろすからだ。

含み笑いで、意外なほどあっさりいいよと言われた。拍子抜けした。

今まで、泊まりに行った友達の家でくらいしかやったことがなかったから、それは兄のポリシーかと思っていた。そういうものでもなかったらしい。

「折角だから大きいのが入ってるのにしようか？」

五歳も年上の兄は、弟と花火をして遊ぶのが楽しいと思える歳ではなかった。それで忘れていただけなのかもしれない。

「前はよくやったよ。明がまだ小学校はいつてすぐらいの時」

明もやりたかったのかと言って、気付かなくてごめんと小さく謝った。

「家族四人で花火やったの？ 楽しかった？」

ぼくは無邪気な振りをして聞いた。

「明、あの頃まだホントに小さかったから、打ち上げ花火をつけるたびにキヤーキヤー言って海の方に逃げて行ってたよ」

「おぼえてない」

兄は表情を保とうという努力をやめて思い出し笑いを始めた。自分から始めた話だけど、言い返せないのが辛い。

「そのうち、そのままコケて泣きやむまで大変だった」

「笑うな！」

「笑ってなんかないよ。ただ、明がかわいかったってだけ。打ち上げ花火はやめとくか？」

「…絶対、意地でもやる！」

年の差には勝てず、楽しげに頭を撫でられてしまった。その上、母の話も聞けなかった。損している気がする。でも、兄は楽しそうだしぼくは花火を買ってもらえそうだから、差し引きゼロということにしておく。

夕方、海岸で待ち合わせして花火をすることになっていた。

予備校に行く兄を見送り、ぼくは祖父の家から自宅に帰った。確実に兄がいないうちにアルバムを探す計画だ。

一番怪しいのは父親の部屋。あの人が隠している以外考えられない。昼間家にあの人がいるはずがない。夕方までたっぷり時間がある。部屋中を荒らしても、元に戻すくらい簡単だろう。

それで、父親の部屋に無断で入り込んだ。誰も見咎めるはずがないと分かっているにも緊張する。

煙草の臭い。閉めきられた部屋には胸が悪くなるような空気が凝っている。がっしりとした黒い机は整理されたまま、白くほこりに埋もれている。クローゼットを開けると扉に指の跡がくつきり残ってしまった。こればかりは元に戻せない。後でほこりを全部拭いてごまかすことにしよう。

耐えきれず窓をいっばいに開けた。

外の空気は中に負けず劣らずムツとして暑い。それでもまだ煙草の臭いがないだけでした。

クローゼットの中は、最後に開けたのはいつだろうというくらい整頓されていた。それを手前から順番に床に並べていく。それらしい段ボールが出てくるたびに期待したが、アルバムも未整理の写真もフィルムも、何も見つけれない。

肘や膝の内側に溜まった汗ぐらい、この状況は不快。

クローゼットに近い順から片付けて、次は机に取りかかる。抽斗を段ごと抜いて中を調べる。

廊下を踏むみしつという音が聞こえた。驚いて振り向くと父親がいた。彼も驚いているようだった。数秒間、無言で見つめ合ってしまった。正面から顔を見たのはすごく久しぶりな気がする。

「何で家にいるの？」

「土曜は休みだ」

「今日、土曜日だったんだ。夏休みで曜日の感覚なくなってた」
彼の目線がぼくの手元に注がれる。無口な彼が口を開く前に言った。

「小さいときの写真って、ウチにある？ 宿題が出てるんだけど」
しばらく考えるように間が空いた。

「写真を撮った気はするんだが見た覚えがない」

「それって無いのと一緒にだよ。思い当たる場所は？」

「ない。そこに無かったんだろ？ 朋にはもう聞いたのか？」

「…お兄ちゃんに、聞くの？」

基本的に鈍感な彼も含みに気付いたらしい。この話は打ち切られた。ぼくはそそくさと抽斗をもとに戻した。全部、無かったことになった。

「アイス買ってきたんだが、明は食べるか？」

「何味？」

「バニラ」

リビングに行って、ソファーに並んで座った。歩いて買いに行ってきたらしく、アイスは少し溶けかけで棒から垂れてきそうだった。二人で会話したということに驚きつつ、黙々と食べた。クーラーの稼働音がやたらに響いて聞こえる。隣で黙っている父は何を考えて食べているのだろう。

いつもよりアイスが甘い。変な感じだ。溶けかけなせいに違いがない。

食べ終わると父は黙ったまま自分の部屋へ帰っていった。煙草でも吸うのかと思っていたら何かガタ音が聞こえた。

ぼくは他の物入れを探した。ほこりを被ったクリスマスツリーの箱や幼稚園の時にぼくが描いた絵、家電製品の空の段ボール箱等よくとつてあるなと思うような物が、いろいろ出てきた。夕方までかって父とぼくが得た結論は、ウチに写真の類は無いということ。もし今日の父の態度と行動が全部演技で、実は隠し持っているのだ

つたら、たいした演技力だと思う。ぼくの宿題は前途多難。二人で無駄に汗をかいた。

待ち合わせの時間が近づいたので、父に一応は礼を言って家を出た。今まで近寄りがたかったのに、そうでもなくなった。父はきつと今日、機嫌がよかったのだろう。

力一杯ペダルをこいで海岸へと急ぐ。かごには打ち上げも入った花火セット、ポケットにはライターが入っている。ライターは、花火をすると言ったら父が持って行けと渡してくれた。自分では思いつかなかっただろう。

薄暗くなってきたではいるけど花火するにはまだ少し明るい。砂浜と道路の境界のガードレールに凭れて兄が立っているのが見える。手を振る兄に振り返したら、ハンドルが疎かになってよたついた。笑われた。また子供扱いされてからかわれるだろう。

「遅かった？」

「そんなことないよ。自転車で、今日はどこまで行ったんだ？」

「友達のトコ。今日、ずっと花火持ち歩いちゃった。とりあえず花火すること自慢しといた」

「羨ましがってくれた？」

「わかんない」

上手くごまかせたみたいだ。砂浜には入らずゆっくりと歩く兄の後を、ふらふらと自転車を押してついていく。

「どこ行くの？」

「駄菓子屋みたいな店があるの知ってたか？ まだ少し明るいから、そこ行つて冷たい物買おう。暑い」

駄菓子も駄菓子屋も大好きだ。赤い三角のセロファンでできたにんじんとか、酒瓶の形をした入れ物に入った粉状のラムネ、キノコみたいな容器に入った安っぽい味のヨーグルト。冷静に考えてあまりおいしい物ではないはずなのに、選ぶのも食べるのも楽しい。当たりくじがついていたりすると、たいした物が貰えるわけでもないのに、笑っちゃうほど嬉しい。

連れて行かれた店は、確かに駄菓子屋が売ってあるけれど雰囲気違った。だからきつと駄菓子屋みたいな店と言ったのだろう。溢れ出して洪水を起こしそうなゴチャゴチャした感じがあまりない。変に整然としているように見える。お面や原色のおもちゃをぶら下げていないせいだろうか。それともぼく達以外客がいないせいだろうか。オレンジの光の裸電球がないせいかもしれない。

店の隅の方に、ガラス張りの大きな冷蔵庫が立っている。中にはコーラやオレンジジュースに混じってラムネが入っている。ぼくはラムネを買ってもらうことに決めた。炭酸系の飲み物は飲むのを止められている。骨が溶けて背が伸びなくなると兄が脅す。ただしラムネは例外。そんなにちよくちよく飲むものではないし、あまり売っていないからという理由で兄の許可が出ている。

ラムネにぼくが胸をときめかせている間に、兄はおかしを物色していた。

「お兄ちゃん、おかし買うの？」

「ああ。明もなんか欲しいのある？」

「ラムネ、ラムネ買って！」

「いや違って、おかし」

ラムネだけでなくおかしまで買ってくれる気になっているらしい。ここは素直に買ってもらおう。迷う。迷うけど、迷っている間に兄の気が変わったらいけない。すばやい熟考の末、サクサクした香ばしい物でできたソフトクリームの中に、粉末ラムネが入っているものを選んだ。兄は小さなびん入りの飴を買っていた。見たことのある物のような気がした。違う駄菓子屋で見たことがあるのかもしれない。

お金を払っているとき、新しく一人客が入ってきた。兄とだいたいい同年くらいの男の人だ。大きい人でもおかしが好きでいいんだ、と思った。女の人ならともかく、男で大人になっても甘い物が好きな人はあまり見ない気がする。今、ぼくは甘い物もおかしも好きで、きつと大人になっても好きだ。同じ好きなのに食べられなくなるの

は嫌だ。自分の意志ならいいけど、周りの雰囲気で。でも駄菓子屋にわざわざ来る人がいるということは、そんな雰囲気はばくの考えすぎなだけだったのだろう。

「矢島？」

その男の人が急に苗字を呼ぶので驚いた。兄は誰だかわかったのか緩慢な動作で振り返ると、やっぱりという顔をした。

「なんだよその顔、おれじゃご不満？　ここ教えてやったのおれだろ？」

「お兄ちゃんの友達？」

兄に訊いたはずの言葉はその人に答えられてしまう。

「友達？　イイコト言うね。そうそうお友達だよ、予備校で知り合ったんだ。弟の明君かな？」

見上げると兄は軽く溜息を吐いていた。

「サクノ、その軽い口は閉じてらんないのか？」

「長い長い別れの後、第一声がそれ？　もちろんできるさ矢島君。ただそうすると、君の弟君とはお近づきになれない予感がしたのだよ」

兄と同じ目線で話す人を見たのは初めてだ。その上、兄は負けている。楽しそうに。

「二時間前の授業でも一緒だったんじゃないか？」

「二時間はヒヤクニジュップンもある。矢島、君に会えない時間を一日千秋の思い出過ごしていたのだよ」

「どうせ自習室で寝てたくせに」

ばれたかと笑って僕の方を見て、よろしくと言った。調子の良さそうな人だけど嫌いじゃない。

「これから花火する予定だけど一緒にやるか？」

「邪魔じゃなければ混ぜてくれ、是非とも」

「明、いいか？」

この段階で嫌と言えたるような極太な神経は持ち合わせていない。この人に悪い印象はないし、こういう人がいた方が楽しいかもしれない。

ない。兄の友達に会うというのは稀な体験だし。

「うん、いいよ」

ありがとう友よと大袈裟に喜んで、弟を勝手に友にするなと突っ込まれている。笑ってしまった。

「おまえ何しにこの店来たんだよ」

そのまま出ていこうとしたところをまた突っ込まれる。

「忘れるところだった。誰かに飴あげたら、妙に気に入ったみたいだったから仕込んでどうかと思って買いに来たんだ」

「それ、今買ったところ」

「ホントに気に入ってたんだな」

そう言って、兄が手にしたのと同じ青い小びんを買っていた。

ぞろぞろと三人で、砂浜へと来た道を戻った。その間中サクノさんはハイテンションでしゃべり倒して、兄の友達にしては意外なタイプだなという気持ちを深めた。

「やつぱり、最初は大きいのからでしょ。打ち上げるやつある？」
「ある」

こつちを見て笑う兄をにらみ返す。その様子を見てサクノさんが知りたがる。あの口数の多さでの質問攻撃に負け、白状する羽目になった。かわいいねーと頭をくしゃくしゃに撫でられた。

「さあ、落ち着いて逃げたまえ」

花火をセツトするとおもむろにぼくに言った。にらみつけるとニヤツと笑った。

「なんなら明君が火をつける？　できるかな？」

ちやかすような言い方が気に入らなくてやると言い切ってしまった。言ってからそんなことで意地になるなよと自分で思った。言った次の瞬間から後悔。ばかだ。

ライターで火をつけようとした。緊張してなかなか火が点かず、点いたと思つて急いで後ずさったら三步目で尻もちをついた。我ながら格好悪い。そのままでの姿勢で花火を見上げた。それでも兄達は頑張ったと褒めてくれた。特にサクノさんは大袈裟に褒め称えてく

れて、褒められているのかバカにされているのかわからなくなりそうだった。とりあえずからかっているのは確からしい。

火花が色を変えながらしゅわしゅわ言って噴水みたいに吹き出し、きれいだった。残りの手に持つ花火は安心して楽しめた。海に向かって振り回して緑色の残像をつくったり、コンクリートにするみたいに砂も焦がして字が書けるかやってみたりして遊ぶ。最後は定番通り線香花火をした。

楽しかったけれど、サクノさんのせいで母のことを思い出す隙間がなかった。作戦失敗。夜の海は怖い物ではなく、兄も楽しそう。サクノさんがいるおかげだろう。でも、あの人は馴れ馴れしいと思う。兄にくつつきすぎ。これは嫉妬？ お兄ちゃんがとられちゃった？ まだまだ自分はガキだ。子供なのは本当だから、仕方ない。それはそれでいいことにしよう。

夏休みの楽しい思い出はできた。しかし、自分の宿題は振り出しに戻った。なぜこんなに母親の痕跡を探すことが困難なのだろう。本当に存在していたかさえ疑わしくなってくる。いたような気がするなんて、いないと同じだ。

遺品がない。写真がない。一緒にいた記憶がない。思い出がない。顔も覚えていない。兄と自分を母が産んだとは限らない。血が繋がっていない可能性、父が浮気して外で作った可能性が絶対には言い切れない。ぼく達兄弟と顔は似ているらしいからきっと血の繋がりはあると思う。でも似ていると言う他人の記憶は、どこまで当てになる？

母とは一体誰だろう。ぼくの母親ではないかもしれない。父の妻とは限らない。戸籍上たぶんそうなっているだろうというだけだ。だけど母が、祖父の子供なのは確かだ。血縁関係はわからないが、結婚前の続柄は次女だったはずだ。祖父と何の関係もなかったならば、ぼく達と祖父も関係のないただの他人だ。長い夏の間、ぼく達の面倒を見ようなんて酔狂なこととは思いつかなかったはずだ。

そういえば祖父に母のことを訊いてみたことがない。会う時はいつも兄と一緒にいたからだと思う。だけどそれにしだって写真の一枚くらい飾ってあってもいいはずだ。祖父にとっても母は禁忌なのかもしれない。

「おじいちゃん、夏休みの宿題で小さいときのぼくの写真探してるんだけど、ない？」

「どうだろうなあ。明君の家にはなかったのかい？」

「だいぶ探したんだけどみつかなかった。写真を撮った覚えはあるってお父さんは言うんだよ？」

「そうか。それならおじいちゃんのウチにあるかもしれないねえ」

「あるとしたらどこだと思う？」

「二階の物置部屋かねえ」

二階建ての一軒家に一人で暮らしているから、部屋はいつも余っている。当然だ。この家は家族四人で住むために建てられた家。一人で住むには広すぎる。だから、納戸と化した部屋や使っていない部屋がある。もったいないと思う。だけどその空いたスペースを、何で埋めるべきかわからない。祖父は夏の間、ぼく達でそこを塞ぐことにしたのかもしれない。

この家に家族四人で暮らせた時間はどれぐらいあったのだろう。蝉がうるさく鳴き、風鈴が揺れる音が耳につく。その音を聞いていると一人きりという手触りをリアルに感じる瞬間がある。同じくらい静かな自分の家に一人でいたとしても感じることはない、冷たく乾いた感触の物。この家は祖父がいるというだけで、もう生きてはいないようだ。

二階に上がってみると意外と風が通り、気持ちがいい。窓から海が見えたらいいのにとここに来るたび思う。おもしろそうな物は何も見えず、人影さえ見えない。実際に外に出たらアスファルトからのぼる陽炎くらいは見えるかもしれない。

目新しい物を見つけることは諦めて、地道な作業を始める。先ず押入から、家でやったのと同じように順番に荷物を出していく。一冊、アルバムが出てきて期待に動悸が速くなった。結婚式の物らしい。開いてみると知らない人達で、よくよく見ると祖父母の名前が書かれている。「白取秀臣・月野」同姓同名の別人かと思うくらい若い頃の祖父は今と違う顔だ。

結局押入の中に写真はそれぐらいしかなかった。押入の他、残っているのは筆筭が二つと鏡台。まさか筆筭に写真は入れないだろう。鏡台の探索に手をつけた。

祖母か母かその姉か、鏡台はその誰かのものだったのだろう。ドレッサーと安っぽく呼ぶのは悪いような代物だ。木目調の鏡台とセットでゴブラン織り風の布張りの椅子もある。鏡は三面鏡になって

いるようだったが、開いてみる気にならなかった。死人の鏡に自分が映るのは、どことなく気持ち悪い。

一番上の大きな抽斗を開けると、嗅ぎなれない粉っぽい臭いがした。中には雑然と使いかけの口紅や、その他コンパクト状の物が入っている。次に開き戸を開けた。整髪料や香水瓶、縦にかさばる物を集めてあるようだ。その中の一つ、青いガラスびんにどことなく気を引かれる。もし飴が入っていたら中身は酷いことになっているかもしれないと思った。カビとか虫が湧いてそのまま死んでいるとか。見なかったことにすれば良いとも思う。でも好奇心に負けた。怖い物見たさというやつだ。

青いびんは白くうつすらホコリを被っていたけれど、不気味なことにはなっていなかった。中に入っていたのは飴でも化粧品でもない。幾つもの白い破片。それに混じって砂粒が少しだけ。意味もなく振ってみると、痛そうな乾いた音がした。

海の破片だ。唐突に思い出す。ずっと昔、青いびんに海岸で拾った貝を入れた。あのびんがこんな所にあつた。懐かしい大発見だ。光に透かして、びんの中をもう一度確認。服にホコリがつくのも構わず、胸に小さなびんを抱きしめる。

祖父に見せに行こう。そして何故こんな所にこれがあるのか訊いてみよう。

一階に下りると祖父は昼ご飯の準備を始めたところだった。台所は熱気がこもっている。火にかかっている大鍋が原因だ。

「今日のお昼はそうめん？」

「スパゲッティとどっちがいい？」

「暑いからそうめんがいいなー」

「そうめんだね。そろそろ沸いたかな？」

「おじいちゃん、上でこんなの見つけた」

振り返ったとたん鍋の蓋が手から落ちた。湯気で濡れた蓋が床でぐわんぐわんいつている。

「足！ おじいちゃん足、大丈夫だった？」

「あし？ ああ足の上には落ちなかった。いや、年かねゝ手もおぼつかない」

動転しすぎ。ごまかそうと何も聞かなかったようにそうめんを茹でる姿は、滑稽に見える。床に転がったままの鍋蓋がシールだ。

「どうしたの？ 昔、これと同じの見たことあるんだ。お兄ちゃんと貝拾いした。なんで鏡台の開き戸の中にあるの？」

「鏡台の中か。…あれはおばあちゃん達のものだからなあ。あの中に何が入っているか、あそこは見たことがないから、おじいちゃんには分からないな」

「見たらだめだった？」

「…いいや、ばれなければいい」

「おばあちゃんに？」

とつくの昔に死んだ人に？

「おばあちゃんだけじゃない。アサミと朔乃にも知られたらいけない」

「朔乃はお母さんだよ。じゃあアサミって伯母さん？ なんて見たって知られたらダメなの？」

「勝手に自分の場所みられるのは、明君だって嫌だろう？」

振り向かずにつづから、どんな顔をしているか見えなかった。

昼食のそうめんはいつにも増して味がなかった。ミョウガがネギやショウガと一緒に薬味に刻んであるのが家と違って不思議な感じだった。ミョウガを入れて食べるのは初体験なのに、おいしいかどうか分からなかった。ネギよりしゃきしゃきしていると思った。

食べ終わってから、また二階に上がって鏡台の中を見てみた。もう一本似たような、貝の入ったびんをみつけた。いったい何本のこのびんはあるのだろう。

おじいちゃんと二人きりでずっと家に籠もっていても、全然おもしろくない。閉じられた場所にいるのは飽きた。急に人混みの中に行きたくなった。ここ最近、祖父と兄しか見ていない気がする。家

に帰った時、
そう言えば父がいたか。

自転車に乗って駅の方へ向かう。とりあえず人のいる場所へ。人がたくさんいたから何がある、ということはない。でも人混みの中にいれば、何も考えないでいられる。そろそろ母を探すことに疲れしてきた。そう思うと祖父の家は、少し息苦しい。

でも、悲しいことにここは中途半端に田舎。駅前に行ってもたいして人はいない。だからといって観光客が来るほどの所でもない。何の取り柄もないベツトタウンだと実感する。人が少ないのは夏休みのせいかもしれない。家族旅行に行った人も多いはずだ。

ふらふらと走っていると、向こうから同じくらいの子供が犬を連れて来た。

「新藤って犬、飼ってたっけ？」

挨拶も何もあったものじゃない。どこから五時を告げる音楽が流れてきた。

「マンションで飼えるわけないだろ？ 近所の犬だ。小遣い稼ぎ、暑いから飼い主は散歩に行きたくないんだと」

まったくだめだよな、ちゃちゃ丸？

犬としゃべっている姿は、学校にいる時よりも年相応に子供っぽい。

「ちゃちゃ丸っていうんだ？ かわいい」

「いや、こいつの本名はムハンマド・山田だ。けどさ、ムハンマドって無理があるだろ？」

大人になる少し前の丸々とした柴犬系の山田さんちの雑種にムハンマドは、確かに辛い物がある。そんな濃い名前を付けるくらいなら、山田太郎の方がまだ似合っている。

いいんだよ、こいつはちゃちゃ丸って呼んでも返事するから。新藤が言い訳じみたことを言う。そのまま二人の散歩にお供することにした。

そういえば新藤も家族旅行とは縁の遠い奴だ。口にすれば反論は目に見えている。泊まりがけで母親と二人で何しろって言うんだ、て。まあその通りだと思う。

「そうだ！ おまえに言つとくことがあつたんだ」

それによれば、ウチの兄が不審な行動をしているらしい。まさかと最初は否定した。しかし場所は海だという。

「一人でしゃべってたぞ、楽しそうに。ヤバくない？ 受験生だったっけ？ 煮詰まつてるんじゃないのか？」

去年、新藤の隣の家に浪人生がいて、その人は夜中に木刀で電柱を叩きまくるという奇行に走っていたそうだ。大学入試というのは、絶対大変なんだと新藤は言う。

「別に家では変じゃない。見間違いとかだろ。きっと誰かいたんだよ。それかケイタイとか」

新藤は首をひねりながら疑わしそうにぼくを見る。

「何時頃だった？」

「六時過ぎか、七時ぐらいだったと思う。聞いてどうするんだよ」
行つてみるに決まつてる。兄がヤバイかヤバくないか自分で見ないと納得いかない。

「行くのはおまえのかつてだけどさ、暗くなつてからあんまりふらふらするなよ」

なんだか心配しているような口振りに、まじまじと新藤を見る。
目が合うと彼はニヤツと笑った。

「明はかわいいんだから。女の子と間違えて、変態に誘拐されるぞ」
「なんだよそれ。けなしてる？」

「けなしてるー。まあ実際、そこら辺の女より明の方がかわいい顔してるから。美少女？」

「気持ち悪いこというなよ。ぼくは男だ。ちゃちゃ丸！ こんな奴噛んじゃえ」

ワンと一声ちゃちゃ丸は返事をしたが、意味は分かっているらしくぼくにすり寄ってきた。力が抜ける。苦笑してちゃちゃ丸の頭

を撫でた。

おまえがいると散歩が先に進まない。新藤に邪魔者扱いされたので、ちゃちゃ丸をもう一度撫でて別れることにした。調度お散歩コースは海岸へとさしかかったところだった。ぼくは砂浜に降りていった。

ヤバイ、ヤバくない。おかしい、おかしくない。その境界はどこにある。基準がはつきり決まっていなくて何も測れない。ぼくから見て兄は普通。新藤から見て兄は異常。彼とぼくの間のズレ。むこうとこちらで基準がどうも違うらしい。むこうとこちら、そんなことを前も何か考えていた。母だ。せつかく考えるのを止めたのに、結局そこに戻ってしまう。

ヨモツヒラサカのむこう。

ヨモツヒラサカ、そのむこう、人魚の国に母は行った。行つてどうしたのか分からない。行く前のことすら、こんなに探して見つからない。そこはこちらと違う基準に支配された場所。こちらの基準で覗いても、何も見ることの出来ない場所。

こちら側から理解できない場所に行くこと。たぶんそれがヨモツヒラサカのむこう側に行くということ。もしそうなら、兄は新藤から見てむこう側の人。兄を異常と思わないぼくは、どちら側にいる？ そもそもヨモツヒラサカ、そのむこうには何がある。

「ヨミの国があるのさ。」

口に出した覚えがないのに、返事があつた。唐突に男が横に立っていた。本当に変な人が来た。まだ真つ暗になつていないからと油断した。どうやって逃げよう。追ってきたらどうしよう。

「酷いなあ、そんなに驚くことないと思うよ？　一緒に花火で遊んだ仲じゃないか。」

「なんだ、サクノさんか。…どうして？」

一瞬の中で逃げる方法を必死で考えていた。その分、知り合いだと分かつて気が抜けて思考が停止した。

「どうしてって？　何でここにいるかつてこと？　ヨミの国だって

答えたこと？」

言語中枢まで脱力してしまった。言葉にならない。

「ここにいるのは、矢島を待ってるからだよ。で、答えられたのは、おれが明君の、お母さんだから！」

顔中で笑った。だからぼくは、何のことを言っているのか反応できなかった。

「もつとなんかさ、こう、リアクションないの？」

「は？」

サクノさんは半端な長髪ではあるが、どう見ても男。しかも兄と同年。年の差、五歳。どうやってぼくを産む。

あはは固まつてら、と疑惑の主はご満悦。

「同じ名前っただけだよ。サクノっていうんだろ？ お母さん」

付け足された『矢島に聞いた』という言葉が更に混乱を深める。

何でこんな他人に、母の話を兄がするのか。

バカにされている。しているのが目の前にいるこの人なのか、兄なのかは別として。子供だからといって、いいように遊ばれるのは癪に障る。このままこの人のペースにはまっついてはだめだ。からかわれ続けるのは絶対に嫌だ。

「そんな話、誰も聞いてないよ。それよりヨミの国って何？」

へらへらと余裕の笑みを浮かべ、彼は丁寧な答える。その懇切丁寧な口振りさえもが疎ましい。

それによると、ヨミの国は黄泉の国というらしい。死者が行く場所なのだそうだ。古事記という神話に出てくると彼は言った。

まだ世界が出来て間もない頃、伊耶那岐という男神と伊耶那美という女神が天より遣わされた。二人は夫婦だった。だが伊耶那美は子供を産むときに死んでしまった。伊耶那岐はその死に耐えられなかった。それで死者の国へ伊耶那美を迎えに行くことに決める。そこが黄泉の国。その時、黄泉の国は生者の国と地続きだった。それが何処なのかは記されていない。ただ、伊耶那岐はそこに辿りついた。

けれどそれは遅すぎた。再会した伊耶那美は言う。この世界の食べ物を、もう自分は食べてしまった。だから生者の世界には帰れない、と。伊耶那岐は納得しなかった。それで伊耶那美はその世界の支配者と相談する。結果、帰る許可が下りる。ただし伊耶那岐は伊耶那美を絶対に見てはならないという条件があった。

見るなどと言われると見たくなる。伊耶那岐は伊耶那美を振り返って見てしまう。そこには変わり果てたぼろぼろの姿の伊耶那美がいた。虫が蠢く腐乱死体。伊耶那岐は余りのことに逃げる。姿を見られたことに逆上した伊耶那美は執拗に追いかける。命からがら逃げた伊耶那岐は大きな岩を置いて黄泉の国と生者の世界を区切った。その場所が黄泉比良坂。そこまで追ってきた伊耶那美は岩に阻まれそれ以上追ってくるができなかった。

話を聞きながらぼくは朧な夢を思い出す。ゆらゆらと青く暗い夢、白い女の腕、遠くに見える光の境界。

「黄泉の国が何か分かった？」

「うん。何でそんなに詳しいの？」

「好きなのさ、神話とかそういうやつ。矢島も結構好きだよ。聞いてみなよ、きつとおれよか詳しいから」

ぼくの知らない兄を知っている。そんな口振りが気にいらぬ。それがどうも顔にでていたらしい。ほつぺたを引っ張られた。痛くはない。冷たい指だ、とだけ思った。

されるがままは自分らしくない。指を振り払ってやり返そうとした。余裕の顔で避けるから、ついむきになって加減もなく思い切りほつぺたを引っ張った。顔も冷たかった。

「ヤヒヒヤー、助けてー」

兄を見つけて思わず手をひっこめた。

「楽しそうだな？ 明はもう暗いのに、こんな所に何でいるんだ？」
本当はこつそりと、海岸にきた兄が一人にいるかどうかを確かめる予定だった。失敗したのは絶対サクノさんのせいだと思う。でもそんなこと言えない。上目遣いで見る兄の顔は、ぼくの答えを聞く

前から怒っている。

「…お兄ちゃんのこと待ってた」

「おじいちゃんにはちゃんと saying てきたのか？」

「言ってない。ごめんなさい」

「今すぐ、自分でおじいちゃんに謝れ」

兄の携帯電話を渡された。電話するよりメールの方が気が楽なのに、と思っている間に登録してある番号を兄が呼び出してしまった。すぐにつながった。

「もしもし、明です。おじいちゃん？」

「こんな時間まで何やつとる！」

本気で怒っている声だった。いつも優しい人だから、その分とも怖い。

「ごめんなさい。駅の方まで行っただ後、帰ろうと思ったんだけど、お兄ちゃんの帰る時間がもうすぐだなって思っただから。…ごめんなさい」

「…それでお兄ちゃんには会えたのか？」

一緒に帰ることを伝えると、落ち着こうと努力しているような声で、気をつけて帰ってきなさいと言われた。

「おじいちゃんは何て？」

「何やってんだって怒られた。それと気をつけて帰ってきなさいって」

「まあ、怒られて当然だな。何も言わずに出てきたんだから」

うわっ矢島にまで怒られてるよ、と楽しそうに囁し立ててサクノさんがぼくの髪をクシャクシャにかき混ぜた。意外にも優しい感触が、元気づけようとしてくれているみたいに感じた。いつも無意味にむかつく人なのに、どうしてこんなことで慰められてしまうのだろう。単純に出来ている自分が情けなくもおかしい。

自分を外から眺めれば、大事に心配されている事実を見つける。中学生で子供だからだと思う。子供扱いだと思う。でもくすぐったいような気持ちにもなる。おじいちゃんに後でもっと怒られるのだ

としても、ちゃんと我慢できる。

家に着いて、開口一番ただいまより早く謝った。祖父は、これから遅くなる時はどこに何しに行くのか言って行くとぼくに約束させた。それだけでこの話は全部終わってしまった。但し三人で食べたこの日の夕飯はとても静かで、テレビの音だけが響いて居たたまれなかった。

次の日、兄が出かけていった後、話があると祖父が改まった調子でぼくに言った。

昨日の沈黙はフェイントで、これから怒られるのかと身構えた。座卓を挟んで差し向かいで正座した。

祖父は二つのびんを置いた。コトリと硬くて冷たい音がした。

「この間のびん？」

「そうだ。おじいちゃんは今君に暗くなってからウロウロして欲しくない。もちろん危ないからというのもある。だがそれ以上に、夜の海岸に近づかないで欲しいからだ。ただそう言っただけじゃあ明君は納得してくれない。それもわかつとる。だから、おばあちゃん達の話しよう」

驚いた。話にどういう繋がりがあるのか全く解らない。母を含めて死んだ人達の話を書きちゃんと聞いたことがない。それを自分から祖父が話そうとしている。この間、曖昧にごまかした青いびんまで持ち出して。

「これは、たぶん…代わりなんだ」

びんの中には、何の変哲もない貝の破片が入っている。

「何の？」

「伯母さんとおばあちゃんだよ、どっちがどっちか知らないが」

伯母は朝美という名前で、びんに貝を集めることが好きだったそうだ。伯母自身が集めたびんはもうない。その伯母は海難事故で亡くなった。溺れてしまったらしい。とても泳ぐのが上手な人で、誰も彼女が溺れるなんて考えもしないことだった。

「生まれかわれたらイルカか人魚になる。そんなことを冗談交じりによく言っていたよ」

祖父は懐かしむような悲しむような顔で微笑んだ。

彼女が亡くなったのはまだ高校生の頃だった。祖母はその死によって、半ば狂ったようになってしまった。引き上げられた遺体を見て、これは朝美じゃないとはつきり宣言したという。朝美は海に行

つて、人魚になっているはずだからと。

しばらくすると落ち着いて、日常生活は支障なく過ごせるようにはなった。それでも朝美の死は認めなかったけれど。そのせいで家に仏壇を置くことができなかった。けれど家族全員、仏教を信仰していたわけでも何でもないから、それ自体はたいしたことではなかった。

「一年が過ぎた頃だったかな、おばあちゃんとお母さんが二人で貝を拾いに行ったのは。片方はその時のびんのはずだよ」

朔乃は朝美に連れられて、貝拾いに行っていた。それを思い出しているだけだろうと、気にしていなかった。

「おばあちゃんが家を空けることが多くなったのが、ちょうどその頃だった」

またどこかがおかしくなつて、徘徊しているかもしれない。祖父は本気で心配になつて、祖母を問いただした。朝美に会いに行つていると祖母は答えた。人魚は陸に上がつてこれないはずだろう、と祖母に合わせた問い方をした。夜だもの大丈夫よ、と祖母は言った。夜が大丈夫な理由になるとは思えなかった。こつそり祖母の後を追つてみても、祖母は一人で海岸まで行き独り言を言つて帰ってくるだけ。

「精神病院、今はなんと呼ぶか知らないが、それに入れようかとも思った。だがなあ、あそこは、入ったらでられない所、恐ろしい所という印象が強くて、偏見だとは思うが、正直なところ躊躇った。それで朔乃に相談した。おばあちゃんの娘だから」

母は祖父に、祖母が海岸で自分と同じくらいの女の人と会つていたと言った。相談された母も、とりあえず祖母をつけたらしい。

「朔乃は、会っているのは朝美とは別人だと言った。それを聞いて、ツキノがまたおかしくなつて、幻覚を見ているのとは違うと思つた」
「ツキノ？」

「おばあちゃんのことだよ。つい名前で言つてしまった」

そして、祖母を恐ろしげな病院に入れなくて大丈夫だと気が緩ん

だ時、台風が来た。電車のダイヤが乱れて、その日家に着いたのはいつもよりだいぶ遅かった。家に着くと傘も差さず、びしょ濡れになった朔乃がいた。

「朝美が迎えに来たから、自分も人魚になる。そんなようなことを朔乃に言って、行つてしまつたらしい」

母に着替えて家にいるように言つて、祖父も探しに行つた。海にたどり着いた時、祖母はまだそこにいた。そして次の瞬間、波に呑まれた。

「遺体はあがらなかった。おじいちゃんは、自分のことで手一杯になつていた。お母さんは気丈に振る舞つていたよ」

たぶん本当に振る舞つていただけだったのに、気付いてやれなかった。やつと気が回るようになった時には、朔乃は月野が人魚になったと言ひ張るようになっていた。いつの間にか貝拾いにも行つたらしく、大事そうにいつもびんを持つようになった。

「お母さんが高校を卒業するまで、おじいちゃんは気を揉んだよ。だけどお母さんは大丈夫だった。高校を卒業して、大学へ行つて、お嫁に行つて」

祖母のことを人魚になったと言つのは変わらなかった。しかし、その考えと天国に行つたとかあの世に行つたという考えが、そう違うようには思えなかった。同じことだと思つた。

「結婚する時、びんは置いていくように言つた。もう大丈夫だとは思つていても、安心はできなかったから」

中途半端な安心で、月野の時は取り返しのつかないことになった。「だが、それも無意味だった」

兄に聞いたことから考えると、母の所にも迎えがきたらしいと祖父は言つた。きつかけが何だったかはよく分らない。けれど母が月野という女の人と、夜の海岸で会つていたのは確からしい。

「おじいちゃんには理解できないことばかりだ。わかるのは、夜の海岸で迎えに来る人と会うということ、それだけだ」

もつとたくさんのがこの話の中にある気がする。母のことを祖

父はあまり多くを語らなかった。それでも情報が雪崩を起こして、考えがまとまらない。

「だから明君に夜の海に、間違っても一人で行って欲しくない。もしお迎えに会ってしまったら、連れて行かれてしまう」

まだ泣いてはいないが、祖父の目は赤かった。びんを片づけに二階へ行ってしまった。

ぼくが昨日海岸に行ったことは、絶対に言えない。

それからの日々を、ぼくは死んだようにおとなしく過ごした。もう、母のことを嗅ぎ回ろうとは思えない。その話題に触れるのが憂鬱だ。だけど宿題だから、この夏の間にハッキリさせなくてはならない。

母のことを避けて、宿題を済ませたい。そうできたらいいのに。

母の話がタブーな理由が判ってしまった。兄は母を思い出したくない。そう思っていた。母を憎むか嫌うかしているのだと。でもたぶん、そういう問題とは違う次元の話なんだとわかった。

祖父が波に吞まれた祖母を見てしまったように、兄も母が帰れなくなる場所を見たらう。ぼくと同じ年で、母親の決定的瞬間を見てしまう。そうとう大きな衝撃があつたはず。それを語りたがらないのは、しょうがない。

兄が、語らないことで自分を保っているなら、その邪魔をしてはいけない。祖父でさえ、見て自分がどうしたか、どう思ったか、それを語ることはできなかった。兄にそれをさせてはいけない。

あまりに無気力なぼくを見て、祖父は心配になつたらしい。外に行つて帰りが遅いと言つては心配し、家の中でじつとしていすぎると言つては心配する。祖父は大変だなあと思う。そんなに心配ばかりで疲れない？ それともそういう生き物だとか。

心配させすぎるのも悪いので、出かけてくることにした。お金のない中学生の行ける所は、そんなに多くない。その上、昼間の外は溶けそうに暑い。家に帰つてマンガでも読んで、適当に時間を潰そう。もっと子供らしく、開放している学校プールに行くとかそういうことをした方がいい気もする。どっちにしても水着がないから、一度家に帰らないとだめだ。

「おい、明！… あっちゃん！」

「小学生の時の呼び方するなよ」

明って呼ぶより反応するからだ、と新藤はけらけら笑つた。

悩みがなさそうで羨ましい。

「久しぶりにどっかに行こうと思ってたのに、何で会つかないか」

「それはおれが会いたかったから。暇なんだよ。おまえんちに電話かけても誰も出ないし」

「おじいちゃんちにいるって言ってなかったっけ？」

聞いたけどさー、番号知らないんだよ、と文句を言われた。

「新藤に会えて、ぼくもちょうどよかった」

「そういう風にあっちゃんと言っの、めずらしいな」

あっちゃんは止めると言っているのにわざと言っ。新藤はそういう奴だ。

「何して暇潰しするか考えてたところなんだ。何かおもしろいことない？ まあくん」

成長期に突入した男にまあくんは似合わない。それがおもしろくて、わざわざ言っ。多少は仕返しになっただろう。小学生の時は同じくらいだっ。身長が、今では比べるのがむかつくくらい伸びている。

結局は途中のコンビニでおやつを買っ、ぼくの家に行くことになっ。今日は土日ではないそうだ。家には誰もいない。外と違っ。クーラーも入る。いまいち健康的じゃないけど、一番だらつとくつろげる快適な場所だ。家に上がる時、誰もいないのにおじゃましますと言っ。新藤を、律儀だなあと思っ。

ゲームをしたけど新しいソフトを買っ。ないからすぐ飽きた。それでとりあえず雑談。宿題の話になっ。夏休みの宿題を『夏休みの友』と最初にネーミングした奴は、なかなかいい根性していると思っ。

「写真が見つからないんだ」

英語や数学のワークはやればできるようになっている。最悪、答えを写すこともできる。この頃無気力で、何をするか考えるのも面倒で、暇でしかたなかった。それで、情性と義務感だけで終わらせた。読書感想文は七月の内に即終わらせた。残っているのは例の家

庭科の宿題だけ。

「一枚も？　ウチなんかアルバム何冊分も、それこそ腐るほどあったぞ。最近の写真の方が少ない」

「そりゃ、おまえがかわいくなかったからだよ。あの、愛らしかったまあくんはどこへ？」

「今でもかわいいあつちゃんに言われたかない、と新藤は余裕を見せた。

「火事にあつたとか、そういうのはないんだよな？　どっかにあるんじゃないのか？　家中全部探したか？」

「探した。探してたら父親が帰ってきて、何か知らないけど手伝ってくれた。すごい驚いた。でもぼくの所にも父親の所にもなかった」
「ふーん、と軽く相づちを打って、おまえ兄貴いたよなと言った。

「いるけどさ、予備校でいそがしいみたいだからそんなこと言えないし、だからって勝手に部屋入るのはまずくない？　理由があつても」

「兄弟ってそういうもんか。いないとよく分からない距離感だな」
「ウチはそうってただだよ、と言いつつ、何をか言いたかった。

「そうだ、兄弟で思い出した。明、おまえこの間、あの後どうした？」

「あの後って？」

「ちゃちゃ丸の散歩の途中で別れたら？　その後どうしたかと思つて、違う道に行こうとするちゃちゃ丸引きずつて、またあそこまで戻ったんだ」

「心配性。だけどあそこでサクノさんに声をかけられて、本気で驚いて逃げるところだった。新藤が変質者とか言うからだ。

「その時も明一人だけだったから、大丈夫なのか？　って思ってた」
「へ？　あそこに降りて行って結構すぐ、お兄ちゃんの友達の人に会つて、お兄ちゃん来るまで一緒にいたよ？」

「いや、そこそこ時間経ってから見たけど、明は一人だった」

異様に自信満々に断言された。人違いじゃないかと尋ねても首を

振るばかり。おかしいとは思うけど、こんなことで押し問答しても無意味だ。話が進まない。

「何だろうね？ でも結局お兄ちゃんをぼくが見つける前に、ぼくがお兄ちゃんに見つかっちゃって確かめられなかった」

「おまえの兄貴のことはおれの見間違いつてことでいいから、もうそういうことはするな」

祖父や兄にも言われた後だったから、新藤におまえはぼくの保護者か？ とふてくされた声で言ってしまった。そうじゃない、おれはおまえが心配なんだ、と臆面もなく言われた。聞いている方が恥ずかしくなってしまった。

同性の友人として、こんなに気恥ずかしい落ち着かない気持ちになつたのは初めてだ。そんなに嫌じゃない自分が意外だ。

帰ったら兄に写真のことをきちんと聞いてみる、という結論でぼく達は帰った。自分の家にいるのに余所に帰るのは変な感じ。そう言ったら、待っている人のいる場所に行くことを帰るっていうんだから別に变じゃない、と諭された。

上手いことを言うものだ。きっと祖父はぼくを待っているだろう。でも皮肉を言わない新藤は、絶対どこか変だ。

今日は暗くなる前に、祖父の家に帰ってきた。八時前に兄も帰ってきた。今日も三人揃って夕飯を食べる。予備校で夜まで授業があるのは今日までだから、明日マンションに帰ると兄が言い出した。ぼくはてつきり夏中いると思っていた。

「そんなこと前からわかってたはずなのに、なんでそんな急にそう言うこと言う？」

「言ってなかったっけ？」

「ゼツタイ、言っていない！」

口げんかになだれ込もうとしたところを祖父が割って入って、ぼくを宥めにかかった。

「言っておかなかったお兄ちゃんがいけない。だけど明君は最近なんだかつまらなそうだ。ここにいるのにも飽きてきたんだろう。おじいちゃんに気を遣っているところもあつたから疲れたのかな？それに夏休みが残っている内にやっておきたいこともあるだろう？」

たたみ掛けられてぼくは折れた。飽きたといえば確かに飽きた。

「…分かった、明日帰る」

帰っても、あの家では誰も待っていてくれない。待っていて欲しいわけじゃない。でも、それを「帰る」って言う？　せつかく今日、ここがぼくの帰る場所だと思ったのに。勝手な話だ。

つけっぱなしのテレビから天気予報が流れてきた。一瞬みんな黙る。明日の天気は台風の影響で晴れ。夜半過ぎには上陸の恐れ。台風が来るのに帰る。それとも来るから帰る。どっちかぼくには分からない。

兄はどうも台風が好きらしい。台風が来ると、いつも窓から離れない。ずっと外ばかり見ている。ぼくはそんなに楽しいと思えない。ここにいと夜更かしできないから帰るのかもしれない。今回の台風は夜中に来る予定だし。

来たとき同様自転車に乗って家に帰る。持つて行く荷物はほとんどない。夏休みの宿題一式くらいで、日用品は置いたまま。どうせまた来るのだし、一々持つてくるのは面倒だ。兄は朝から予備校へ行った。三時頃にそのまま家に帰るらしい。ぼくは祖父と昼ご飯を食べてから帰る。祖父とはぼくの好きな特製チャーハンを作ってもらった約束をしている。どこが特製かというと、隠し味に粉チーズが入っている。これを言うともみんな嫌な顔をするけど、ぼくはおいしいと思うし大好きだ。

兄より早く家に着くようにと思って祖父の家を出た。誰の気配もしない部屋の中で、変に緊張している。昨日口げんかしそうになったからだろう。寂しい気持ちの一方で、一人きりは落ち着くとも思った。深々と椅子に座って、溜息を一つ吐いた。

本当の緊張の理由は口げんかじゃない。そんなことで今更きくしゃくしない。よくあることだ。本当のところは、昨日新藤と話したことを思い出したから。一度きちんと写真のことを訊かなきゃいけない。ぼくは悩み始めると長い。自覚はある。だから、やると決めたら即座にやらないといけない。そうでないと何も出来なくなる。

帰ってきた兄が自分の部屋に引込む前に捕まえた。家庭科の宿題プリントを見せて説明した。

「それで、小さいときの写真ない？ あとどうやって名前つけたのかも知ってたら教えて」

写真だけ訊くのは何故か悪いことのように思えた。言った瞬間、兄の顔が曇った。それで父か祖父にそのうち訊いてみればいい、と思っていた質問までごまかすように続けた。

「月っていう字を入れたくて付けたって聞いている。明も朋も月って入ってるだろ？ …写真は探してみないと分からない」

「うん、じゃあ見つけたら教えて」

わかったと言って、それきり部屋に籠もってしまった。不気味に静か。勉強してるのだろう。月にこだわった理由を聞き忘れたのは失敗だったかもしれない。

家にいても暇だと思いながらごろごろしているうちに、時間はあつという間に過ぎてしまう。勉強で煮詰まっているのか、夕飯の時も兄は口数が少なかった。テレビって便利だなあとつくづく思った。何もしゃべらなくても、それなりに明るい雰囲気を作ってくれる。番組の間の天気予報によると、台風は予想よりずいぶん早く本州に近づいているらしい。

降り始めた雨がだんだん強くなっていく。風で飛ばされた木の葉が窓に当たる音がする。雷が落ちて真つ暗な中でお風呂にはいるのが嫌で、いつもより早い時間にはいった。あがって牛乳を飲もうと冷蔵庫を開けて、きれいていることを思い出した。ついてない。そう思った時、玄関で音がした。

「お兄ちゃん？ どっか行くの？」

「ああ、ちよつと」

「コンビニで牛乳買ってきてもらっちゃだめ？」

「だめ」

「ケチ！」

部屋に戻って、急いでパジャマから着替えた。途中でドアの閉まる音が聞こえたけど気にしない。急げば追いつく。こんな最悪の天気之夜に一人で外に出るのは嫌だ。家からどこに行くにしてもコンビニ前は通る。すぐ近くにあるから帰りは走としても、行くのは一緒がいい。

一段抜かしで階段を駆け下りる。妙に反響する自分の足音が怖くなった。エントランスで兄に追いついたときはほっとした。

「お兄ちゃん待ってよ！」

ちょうど出ようとしている所だった。よく見ると、兄は一人じゃなかった。

「あ、何？ 明君も一緒に行く？」

道路に降りる階段の所に、サクノさんがいた。

「どこに行くんですか？」

「人魚の国。この間説明した黄泉の国のことだよ」

「何言ってるんですか。黄泉の国は神話ですよ？ あるわけない」

普通にからかわれていると思つてムキになつて否定した。サクノさんは余裕の笑み。

「本当にそうかな？ でも、人魚の国があることは、知っているはずだよ？ それが嘘じゃないって。おじいちゃんに話を聞いたたろ？」

「…聞いたのか…」

それまで黙っていた兄がポツンと言った。

「聞いたけど？」

兄は物凄い衝撃的なことをぼくが言つたような顔をする。

「ほら、やっぱり知ってるんだよ。なあ矢島、弟も連れて行こ？」

ついて来る気でこんなに慌てて降りてきてくれたんだしさ」

牛乳がきれいと言える雰囲気ではない。

「明も？」

「そうそう。残していくのも悔いが残るだろ？ いっそ二人一緒に」

兄は迷つた顔のままぼくを見て、何か言おうとした。

「二人とも何やってるんだ」

父がいた。兄は一瞬はっとして、それからもう一度ぼくを見た。

凝視されて、ぼくは先に目をそらした。そらしたとたん突き飛ばされて、床に座り込む形でころんだ。

なにが何だか分からないまま顔を上げると、兄は父に体当たりして、サクノさんと走って行ってしまった。知っているシチュエーションだと思った。嫌な予感がして急いで立ち上がった。頭の中は真っ白で、何をしたらいいか考えられなかった。

「追わないでくれ」

聞いてやっとな追おうとしていることに気付く。気付いたときには父の腕の中で、生まれて初めて力一杯抱きしめられた。抱きしめるというよりは、むしろ捕まえられたという感じ。おもいつきり足を蹴飛ばして、腕を振り回して暴れた。手を振りほどこうとした。それなのにどうしても放してくれない。

兄の姿はもう見えない。

圧倒的な体格差。父が自分より強い大人だと、初めて実感した。

「放せ！ お兄ちゃんが行っちゃう！」

肩がじわつと温かくなつて、濡れた感触がする。ぼくを抱き留め、肩に顔を埋めるようにして父が泣いている。

「明まで行くのは、置いていくのは止めてくれ」

ぼくまでというフレーズで、父は兄がどうなるのか、母がどうなったのか、全部知っているとわかった。ぼくと同じだけ知っているとわかった。ぼくが漠然と重ねたのは、母であり祖母だった。

暴れるのを止めた。抱きしめられるに任せた。力が抜けて、代わりに諦観が去来する。人形のように力のないぼくを父が、初めて見せる激情のままに抱き寄せる。

「何で、お兄ちゃんのことですんなに、お父さんが悲しむの？」

今まで完全に無関心を貫いてきたくせに。今更になつて。

「明も朋も似てくから。似ていったから、朔乃に。いつかこんな日が来るのはわかってた。まさかと思っていた朔乃が、義母さんと同じことをした時から、それからずっと」

怖かった。ずっと怖かった。またなくすのが怖かった。それがも

う決まっていることだと頭のどこかでわかっていたから。だから、だからその分距離を置こうと思った。そうしたら冷静でいられると、怖くなくなるかもしれないと思った、だから。

「ぼくは、行かない」

取り乱しきつた父に届くように、きつぱりと宣言した。

力が緩んだ。父はその場に座り込んだ。嗚咽を漏らして泣き崩れる様子を、ぼくは立ったまま見下ろした。この人は、兄を追わない。兄がいなくなったことを、もう受け入れ始めている。

欺瞞だと思う。こんなに簡単に嘘をつくことも、その嘘を信じた振りをすることも。ぼくのこと諦め始めているくせに。

さつき大人だと思った父も、自分とたいして変わらない。二人とも、同じような小さい生き物にすぎない。

兄が行ってしまった道を眺め、ぼくはそれから家へ帰った。ぼくも、もう追いかけてはいけないとは思わない。まず確かめなければならぬ。

玄関からまっすぐ兄の部屋に入った。切ったばかりのクーラーの冷気がまだ残っている。部屋の中は兄の性格を反映して、几帳面に整頓されている。片づいた机の真ん中、青いびんを重しにルーズリーフが一枚あった。

「明へ

明には幸せになって欲しいと思っている。それは信じて欲しい。

五年前、母親が家を出ていった時、明はまだ小さかった。だから母親のことを知らなければこの呪縛から、明は逃れられると思った。隠さなければと思うほど、自分自身では母親にこだわってしまったていたけれど。つい最近それに気が付いた。明は母親がこいしかったかもしれない。悪かった。

予備校でサクノと知り合って、それでやつと気付いた。『

声を掛けられたのは、予備校から帰る途中だった。近道しようと思つて海岸の道を歩いていた。その日、行きは雨が降っていて自転車に乗れなかったから。

「あつ、こつちの方に住んでるんだ？　一緒だ」

さっぱり記憶にない奴だった。

「ひどいな、さつき予備校で隣の席に座ってたサクノだよ、矢島君」

そう言われると、そんな奴がいたような気もしてくる。名前を知っているから、自分で名乗ったのだらうと納得した。それ以来、海岸でよく遭遇した。会ったび同じクラスを自分も受けていると彼は言った。予備校で彼を見かけたことは一度もない。けれど、そう言われると納得してしまう。

サクノは妙なところだらけだった。それなのに、何故かずっと気付けなかった。気付いたのはサクノが朔乃だと思ってから。

『許して欲しい。サクノが朔乃だと知って、嬉しかったんだ。やっ」と迎えが来たと思って。

この感覚は、血筋なのだと思う。母親が何を思っ出ていったのか今なら解る。血筋というと語弊があるかもしれない。それでも、僕はそれ以外の言葉で説明できない。

できるなら知らないでいて欲しかった。けれど、自分が行ったら明はきつと解ってしまう。母を亡くした僕がそうだったように。明のためには、行くべきでない。そのことはよく判ってる。けれどこの誘惑に、僕は勝てない。

夜の海には来ないで欲しい。夜は境界が曖昧になる。向こう側、人魚の国に引き込まれる。もし来てしまったら、明を連れて行くのはきつと僕だ。』

読み終わって、ぼくは重しにされた中身の入ったびんを割りたい衝動にかられた。それを握った腕を振り上げて、でも割れなかった。割ってもどうしようもない。それに、兄がずっと大切にとっておいた母のびんだ。

窓の向こうは嵐。窓辺には青いカラのびんが一つ置いてあった。母のびんをその隣に並べて、クローゼットを開いた。

古い順にきちんと並べられたアルバムが大量にあった。思った

通りだった。適当に取り出して開くと、幸せそうな四人家族が笑って写っていた。

兄を連れ去った台風は、まだ弱まる気配がない。

エピローグ

台風が去った日、ぼくは貝殻拾いに行った。まだ暑いけど、青い空はどことなく秋の気配。空は作り物めいてどこまでも澄み渡っていて、なにもかも飲み込んで澄ましかえっていると思った。まとわりつくような熱が消え昨日までと違う空気は、秘密を抱えてよそよそしい。

ぼくは泣かない。取り乱して泣き崩れる父を見て、気持ちのどこかが冷めてしまった。心の一部が兄について行ってしまつて、それがちょうど柔らかい部分だったに違いない。ぼくは泣かない。泣く必要はまったくない。必要かどうかで涙を測る。そのこと自体が冷たいかもしれない。でも仕方がない。ぼくは悲しくない。父と違って、ぼくは兄と永遠の別れをしたわけじゃない。ぼくと父は違う。

人間の体は海と同じ成分でできているらしい。CMでそんなことを言っていた。兄が海に溶けたから、今ならば兄の体より海の方が濃いだろう。地上の体を溶かして捨てて、兄はそろそろ人魚になった頃だろう。あの海の底の人魚の国には着いただろうか。残った骨が海岸に流れ着いている。脆くて堅い、白い欠片たち。ぼくは昨日まで兄だったそれをびんに詰めた。

海からの帰り道に飴を買った。花火の前に行った店に、今度は一人で行った。

それで今、ぼくの部屋には三本の青いびんが置いてある。母の破片、兄の欠片、飴の入ったもう一本。最後の青いびんに入る日が、ぼくにも来るかもしれない。ぼくはその約束の日を待っている。いつか来る夏を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3664b/>

壊れた海のひとつまみ

2010年10月8日15時30分発行